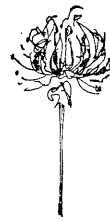


子どもの秋



佐藤 敏 英

東北の夏は短い。夏が過ぎると、間もなく秋はかけ足でやって来る。秋は、造化が与えてくれた子たちへの贈り物。子どもの秋、楽しい秋、そして、遊びの宝庫の秋……。

今日もすがすがしい秋の朝。むんむんした暑さもどこへやら、さわやかな空気が園舎を包んでいる。ぬけるように澄みきった、高く青い空、日本晴れの南の空に、すでに雪を頂いた鳥海が、くっきりと姿を現わし、微笑んでいる。

朝七時半、登園一番のり、三三五姿を見せる子どもたち。園生活が楽しくて、じっとしていられない子ども達の一群である。園のどこに魅かれるのだろう。園のすぐそこ、隣

り合わせの林、丘、山、それが格好の遊び場、そこに冒険心をそそる秋の山が待っているからであろうか。いよいよ、子どもの秋の一日が始まる。出迎えの先生に、明るい朝のあいさつもそこそこに、各自の部屋へと急ぐ。先を争いながら戸外へ……。嬉嬉として飛び廻る朝の自由遊びの時だ。園庭の遊具にとびつく一団、それには目もくれぬ、他の遊び場探険の一群、そして群、群……。子ども集団は、裏山めがけて一目散につっ走る。朝の集いまでは、まだ間がある。子らににとっては魅力の自由空間であり、遊びの秘策をさぐる場なのだ。秘密基地も、そこにはある。しかし、時は残酷にも、山

遊びの子ども達の夢を中斷する。「園庭に集まりましょう」と、スピーカーの声。「ジャックと豆の木」を思わせる高い高い松の木に囲まれた広い園庭。スピーカーの流れにのってくり広げられる元気な朝の体操、二百余名の子ども達の手と足が踊る。裸ン坊、裸足っ子が目につく。バスタオルを手にした子も……。乾布摩擦を終えた子たちだ。続いて、デブ、チビ、ノッポの林のかけっこの始まり。朝の空気に溶け込む快いメロディーが、子どもたちの後を追う。一群、そしてまた一群、木の間がくれのかくれんぼ。

さて、子どもの好きなわが園の、子どもの国裏山とは、一体どんなところなのか、ここに紹介してみよう。(広さ、五、八ヘクタール、松の木が主、樹齢九〇年、約三千本、大きなものは径八〇センチメートル、高さ二六メートルもある。適度に間伐され、山はだは整備されている。緩急自在、斜面も様々で絵本「グルンバの幼稚園」のすべり台にも似て、多く利用される。時には、給食時の青空食堂(野外給食)、そして、おにぎりの日の集いの場にもなる。(本園では月一、二度、お母さんの愛情おにぎりを実施)まさに、自然の恵みの林間園だ。四季折々、園舎内の保育と、林間保育がミックスされ、特に秋は、林間保育が多い。草の実、木の実(どんぐ

り、松ぼっくり)落ち葉集め、茸狩り、等々、子ども発想の遊び、探険ごっこと、子どもが主人公の、子ども天国、子どもの世界がそこに展開される。

茸狩りの一断面

「先生、きのこの顔みたよ」「どんな顔」「灰色してて、やっけ、(柔かい)ような、堅いような……。ジッとにらめで(睨んで)気味悪いの……」「そのきのこならボク知ってるよ。おじいちゃんになるとタバコ吹くよ」(注 ほこり茸、きつねの茶袋とも言う。成長すると茶褐色になり、踏みつけると茶色の胞子が粉のように飛び散る)こうして、精一はいの一日を終え、子どもたちは午後一時すぎ、園にさよならをする。子どもたちよ、大きな夢をもて!!そして、たくましく大らかに育つようにと念じながら一日の仕事を終える。

注 園の周囲の樹木||山桜、楓、紅葉、紫式部、栗、檜、柏、あけび、樺、藤、はぜ、やぶこうじ、うるし等

茸類||あみたけ、はつたけ、紫しめじ、あぶらしめじ、ぬめりたけ、てんぐたけ、紅てんぐ、むささきなきなた、おにぐち、ほこりたけ

(秋田県・西目幼稚園)